世界の中の日本文化『享元絵巻』が語る近世名古屋の魅力

阪井　芳貴ほか 著
風媒社　2018年

名古屋市立大学名誉教授
山田　明

◇書評にあたって

確か昨年一一月下旬だったと思うが、元同僚の阪井芳貴さんから「近世名古屋の本を出版したので書評してほしい」という依頼があった。「近世」という言葉に引っかかったが、親しい阪井さんからの依頼なので引き受けることにした。送られてきた本を見ると、まず色鮮やかな表紙に興味をそそられた。

早速ページをめくると、カラー刷り八ページの口絵『享元絵巻』に目がとまった。これを見ているだけで楽しくなってきた。口絵の最後には、名古屋市博物館による説明があった。「尾張藩七代藩主であった徳川宗春の治世、享保一七年（一七三二）から享保二一年頃の本町通りのにぎわいを描く。右端の広小路より左に進むに連れて南下する構図で、季節も春から秋へと変化していく。芝居や遊郭で賑わう盛り場、南寺町の様子がよくわかる。小売りの店先、食べ物屋、呼び込み看板、参詣者で賑わう寺社境内と芝居小屋、参道の見世物小屋などが描かれ、当時の風俗を知る上でも貴重な資料である。」

この口絵を何回も見ながら、本書をどのように書評するかを考えたが、どうも「名案」が浮かばない。ふつうの書評では本書にふさわしくないと思うが、とりあえずオーソドックスに本書を簡潔に紹介することから始めたい。

◇本書の趣旨と構成

本書は名古屋市立大学人間文化研究叢書別冊ＥＳＤブックレット３で、人文社会学部のスタッフ（阪井芳貴、吉田一彦、ジェームズ・バスキンド、土屋有里子）四人が編者である。初代ＥＳＤ基礎科目の中でも、ユニークな取り組みとして新聞にも取り上げられた「世界の中の日本文化」二〇一七年度の実践報告である。

本書は次の三部から構成されている。第一部「教員の視座から」は、ＥＳＤ基礎科目「世界の中の日本文化」、『享元絵巻』とは何か、『享元絵巻』の魅力、『享元絵巻』が描く近世名古屋の賑わい、と題して四人の担当教員が論じている。第二部「受講学生の成果」は、絵巻文化と『享元絵巻』、櫓、遊郭、名古屋心中―睦月連理玉椿、近世日本の衣服、世界の中の日本屋台、東輪寺と東本願寺掛所、伊勢大神楽の各班プレゼンテーションの紹介などである。第三部「ＥＳＤの視座から」は、ＥＳＤ教育の成果と展望などを担当教員が綴っている。

こうした講義の実践報告である本書をどのように書評するか、正直なところ頭を悩ました。迷いながらも、次の三点から本書について辛口コメントを加えながら、私なりに書評していきたい。

◇教材としての『享元絵巻』

二〇一七年度の「世界の中の日本文化」は、すべての履修者に『享元絵巻』の共同研究に取り組ませ、この授業全体で『享元絵巻』の共同研究を遂行した。その結果、担当教員たちの期待以上の興味深い研究成果が得られ、近世名古屋研究、『享元絵巻』研究、近世名古屋を踏まえた現代名古屋の考究、などに一石を投じるものと評価された、としている。確かに本書を読んで感じるのは、『享元絵巻』の魅力に引き付けられた学生と教員による協働の「研究成果」である。本書から『享元絵巻』の魅力を紹介しよう。

徳川宗春の治世下で繁栄した名古屋の街を描いたのが『享元絵巻』である。紙本着色、縦五六・五㎝、横三七二㎝の長い巻物一巻である。通常絵巻と言うと、絵画部分と詞書（文章）部分が交互に表れるものを想像するが、『享元絵巻』に詞書はなく、豪華絢爛な絵画一色で占められている。絵巻というよりはむしろ『洛中洛外図屏風』や『江戸図屏風』にならぶ風俗画、屏風と言った方が適切かもしれない。収納されていた桐箱の蓋裏には「絵記」と記されており、当初から「絵巻」と呼ばれていたかどうかはわからない。原本は保存の問題もあり一般の目に触れることは難しいが、名古屋市博物館には忠実な複製本が所蔵されている。原本の制作年代は不明であるが、江戸時代中期とされている。

この絵巻には、実に様々なものが描かれているが、とりわけ目立つのが寺と神社である。画面の中央部には、七寺の堂塔と境内の賑わいが大

きく描かれ、そのすぐ右隣に大須観音とその参道の大混雑が描かれている。七寺や大須観音では、境内に芝居小屋が作られ、歌舞伎芝居や浄瑠璃が行なわれて大勢のお客がつめかけた。境内には櫓があがり、役者や浄瑠璃の太夫の名が記された看板が掲げられている。『享元絵巻』が描く本町通、寺社、芝居小屋、遊郭、大道芸などの賑わいは、都市の文化とは何かを考えさせる象徴的な風景と評価されるだろう。

こうした『享元絵巻』のこれまでの研究の到達点、とくに教員スタッフによる共同研究の成果について、本書でまとまった指摘があれば良かったのだが。二〇一七年度の授業では『享元絵巻』を題材にして、共同研究を進める独創的な方式がとられたが、とりわけ「世界の中の日本文化」という共通テーマと『享元絵巻』との関係、受講生の関心・理解なども知りたかった。

◇ESDとしての成果と課題

本書はESDという教育理念にもとづく「教育実践の記録」である。ESDは「持続可能な開発（発展）のための教育」などと訳されるが、それを名古屋市立人文社会学部は教育の柱として位置つけてきた。私も早い段階からESD教育について学部での議論に参加してきたが、実際にESD科目がスタートしたのは退職一年前の二〇一三年度カリキュラムからであった。それで数年にわたるESD教育を評価するのは難しいが、本書を書評するなかでESD教育の成果と課題を考えてみたい。

編者の吉田一彦さんは、この「世界の中の日本文化」という授業には三つの特色があったと思うと書いている。第一は、大学と博物館とが連携し、学校教育機関と社会教育機関とが一体となって授業を実施したことである。第二は、学生が自ら調査、研究し、グループワークを行ない、研究成果を発表するという、いわゆるアクティブ・ラーニング形式の授業を行なったことである。第三は、研究テーマが地域の文化・歴史であるから、学生は教室から、そして博物館からも外へ出て、現地を歩き、現地の方々を訪問してお話しを伺い、あるいは関係する地域の資料を読み解いて研究をまとめたことである。この授業は、〈地域を学び、地域に学ぶ〉地域連携学習の科目となった。

吉田さんも指摘するように、この科目は名古屋市博物館との連携から始まり、ESD教育を早い段階から進めてきた。博物館との連携は一〇年近くの歴史がある。「社会調査実習」阪井班など多くの受講生、ボランティアらの献身的な努力により、大学近くの博物館との連携、協働の作業が実践されてきた。その成果が、今回のESD科目にも継承されている。

さて、本書で扱っているESD科目としての二〇一七年度の授業をどう評価するか。これは本書の書評に直接関わる問題でもある。担当した編者のバスキンドさんも、「この講義の醍醐味は学生の発表で教員も勉強になる」などと評価する。確かに、第二部で紹介されている学生のプレゼンテーションから、学生ならではの示唆に富む指摘がいくつかある。参考になることも多い。学生の「プレゼン」はうまいが、本書のようにパワーポイントの紹介だけでは、なかなか伝わってこない。とりわけ授業で苦労しながら学んだこと、受講する前と後での変化を知りたかった。一人の学生の示唆に富む「自己評価」が掲載されているが、ESD教育を評価するうえでは少なすぎる。学生から意見を集約するのは困難とは思うが、残念ながら本書にやや物足りなさを感じたところでもある。ESD教育の成果が、その後の専門教育やゼミ・卒論など学生生活にどのように引き継がれているのかも知りたい。ぜひ「検証」作業を期待したい。

◇現代名古屋への視座

編者の土屋有里子さんは、『享元絵巻』の前にしばしたたずみ、名古屋という町の真価と可能性を、過去から教えてもらうのも良いかもしれない、と書いている。じつは私の関心は現代名古屋である。でも本書をじっくり読み、『享元絵巻』が描く江戸時代の活気あふれる名古屋から、多くのことを学んだ。バスキンドさんも、この講義からの何よりの収穫と言えば、『享元絵巻』を研究することによって、わずかながら、近世の日本の全体像がよりはっきり見えるようになった気がすると。

先述のように『享元絵巻』の共同研究により、近世名古屋を踏まえた現代名古屋の考究に一石を投じるものと評価されたと書かれている。具体的に、どのように現代名古屋の考究に一石を投じたのか、「現代名古屋への視座」をもっと知りたかった。ESD教育の実践報告である本書に対して、無理な注文だろうか。本書の書評というよりは、私の「思い」も述べておきたい。

ことしも「名古屋市高年大学専門講座」を担当した。私の退職後の楽しみでもある。テーマは「名古屋のまちづくりと都市魅力」であり、最初に取りあげるのが、名古屋市観光文化交流局による都市ブランドイメージ調査結果である。二〇一八年

七月に実施された調査で再び、名古屋は国内主要八都市で「行きたくない」街ナンバーワン。こんな「評価」をどう思うかを受講者に問う。大半の受講者は、こんな結果に「納得」する。名古屋には魅力がないと、多くの名古屋人が考えているようだ。

私は吉田さんや阪井さんらと総合科目「名古屋と観光」を担当し、二〇一三年には共著『名古屋の観光力　歴史・文化・まちづくりからのまなざし』を出版した。「名古屋の観光戦略ビジョン」作成にも関わったので、都市魅力調査の結果には残念な思いである。『享元絵巻』を学んだ受講生が、今の名古屋をどう評価しているか聞きたいものだ。

『享元絵巻』には、江戸時代の名古屋の魅力が詰め込まれている。「語りたくなるまち名古屋」の実現をめざして、と題した名古屋歴史まちづくり戦略も策定されている。近世から現代へ、名古屋の歴史と魅力を語りたくなる企画がほしい。『享元絵巻』とESD教育の実践から学ぶことが多いことを、書評をつうじて学んだ。多くの人に本書を読んでもらいたい。